

(1) 北海道地区研究会の報告

北海道地区研究会報告（2000年度）

日 時：2000年4月15日（土）13時30分～

場 所：北海学園大学

出席者：大野 晃、大沼盛男、小内純子、酒井恵真、松宮 朝、工藤貴子
工藤康彦、香田 潤、寺田悦子、野村潤也

報告1 松宮 朝「北海道農村地域形成の変容

－三市町村の集団活動の比較分析から－

松宮報告は、規範的理論としての内発的發展論が陥りがちな問題を乗り越え、近年の地域形成の変容を説明する分析枠組として再構成することを目的するものであった。報告では、まず農村社会学、都市社会学、地域社会学各分野の分析枠組の批判的検討が行われ、政策主導の地域形成要因と農業者主導の集団活動の地域形成要因の二つを二元論的に把握するのではなく、相補的に扱う必要性が強調された。そして、二元論的な把握を克服するために、集団レベルに焦点を当てた分析枠組が導かれ、その分析枠組にそって、道央大規模水田に位置する三市町村（新篠津村、北竜町、滝川市）の比較分析が試みられた。三市町村ではいずれも一律の国や道の政策が展開されていにもかかわらず、地域形成の展開過程に「違い」があることがま

ず指摘された。続いて、その「違い」をもたらした要因が、集団レベルの分析から導き出された。結論としては、「違い」を生み出している重要なファクターとして、政策推進に先行する集団活動のあり方と集団活動を結びつける水平的ネットワークの存在という二つの点が強調された。

以上の報告後の討論では、時間の関係で三市町村の分析に十分な時間が割けなかったところもあり、その点の補足を求めるものが多く出された。北海道農村社会の特質の捉え方や三市町村の基礎構造の把握の仕方、および女性グループの活動に対する評価の視点などに議論が集中した。

報告2 大沼盛男「農業改革とロシア極東農業」

大沼報告は、氏らが1989年から約10年間にわたり行ってきたロシア極東農業調査の報告である。調査はアムール州、ハバロフスク、沿海地方、サハリン州の4地区を対象に行われ、なかでもハバロフスクのラゾ地区の1農場については重点的な調査が行われている。

報告は、農業改革以前の極東農業について簡単にふれた後、改革後の実態分析が詳細なデータに基づいて行われた。社会主義国家ソ連の崩壊に伴い実施された1990年の農業改革では、コルホーズとソフホーズを解体し、その上に農民経営（フェルメル）を創出することが目指された。しかし、実際には、1993年7月1日段階でも、改革以前の体制をそのまま維持している農場が約4分の1を占め、集団農場として新たに再編されたものも含め、その経営内容は厳しく状況におかれている。なかには解体・消滅してしまう農場も現れてきている。実際、改革後は、耕作面積、畜産の飼養頭数、農用機械の装備などは軒並み減少・後退しており、極東農業全体が衰退化の方向をたどってきている。従って、新たに創出された農民経営も順調なものは少なく、減少傾向にあり、またその担い手も農業経験がない都市住民出身者がかなりの比率を占めている点などが指摘された。

続いて行われた討論では、改革に伴う土地所有権の移転のあり方などが論点となった。特に、大野会員からルーマニアの現状が紹介され、それとの比較によりロシアの特徴が浮き彫りにされた。

(文責：小内純子)